



ショートコメント

★★★★

Data 2023-82

キャロル・オブ・ザ・ベル 家族の絆を奏でる詩

2021年/ウクライナ・ポーランド映画
配給：彩プロ/122分

2023（令和5）年7月12日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：オレシア・モルグレット
ツ＝イサイエンコ
脚本：クセニア・ザスタフスカ
出演：ヤナ・コロリョーヴァ
／アンドリー・モスト
レーンコ／ポリナ・グ
ロモヴァ／ヨアン
ナ・オポズダ

みどころ

2022年2月24日に勃発したウクライナ戦争の戦況とそれを巡る政治状況については、連日TVの解説番組が続いているが、本作を鑑賞することによって、それとは違う視点からウクライナという国を考えるきっかけに！

ウクライナ戦争の勃発を受けて、近々、ソフィア・ローレンとマルチェロ・マストロヤンニが共演した『ひまわり』（70年）がデジタルリマスター版が上映されるから“必見”だが、本作に見る、ポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人一家の悲劇とは？

少女の声によるウクライナ民謡「シェドリック」＝「キャロル・オブ・ザ・ベル」の歌声は可憐で美しいが、そんな「クリスマス・キャロル」と現実との乖離ぶりを、本作でしっかり確認したい。

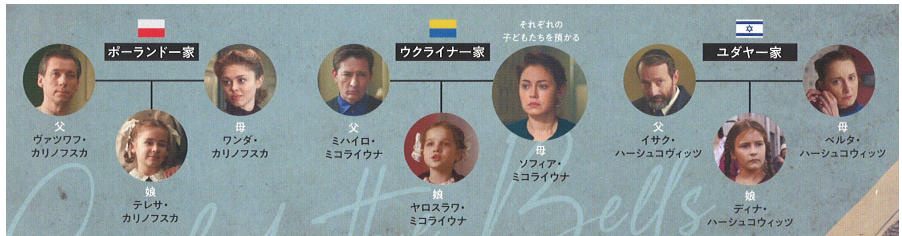
— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆チラシによれば、本作の謳い文句は「占領され続けるウクライナで、戦争でさえ奪えなかったものは 民族を超えた愛と歌に込めた希望」。ロシアによるウクライナ侵攻が始まったのは2022年2月24日だが、ウクライナ出身の若き女性監督オレシア・モルグレットツ＝イサイエンコは、それを予感していたかのように、本作を2021年中に撮り終えていたようだ。

現在もウクライナの首都キーウに住み、子供を育てている母親でもある彼女なればこそ、「老いも若きも、ウクライナに生きる人々の中に戦争や悲劇的な出来事を経験せず生き延びている人は一人もいませんので、この映画に取り組むことは私にとって非常に重要でした」と語る言葉には重みがある。戦後78年間の平和を奇跡的に享受してきた日本では、「平和は憲法9条さえあれば大丈夫」「戦後の平和は憲法9条のおかげ」という、何とも教条主義的な考え方が今なお存在しているが、それと対峙される（？）オレシア・モルグレットツ＝イサイエンコ監督の本作に込めた思い、をしっかりと感じ取りたい。

◆1939年9月1日に起きた、ナチスドイツによるポーランド侵攻は電撃的に成功したが、ソ連の反撃（反転攻勢）によって、ポーランドはドイツとソ連に二分された。その結果、ポーランドではアンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（07年）（『シネマ24』44頁）のような悲劇が世界的に有名になった。ポーランドの東に位置するウクライナはポーランドと同じように、第二次世界大戦中、西からはドイツに、東からはソ連に脅かされ続けてきた。そして、大戦終了後はナチスドイツを東方から打ち破ったソ連の支配下に置かれることに。

本作が描く時代はナチスドイツによるポーランド侵攻の少し前。舞台は第二次世界大戦期のウクライナで、当時はポーランド領だった町のユダヤ人夫婦が所有する家だ。その家の1部を、ポーランド人家族とウクライナ人家族に新たに貸すことになったことにより始まる3家族のぎこちない交流から本作のストーリーが展開していく。その3つの家族は、パンフレットを引用すれば次の通りだ。



◆ナチスドイツの支配が強まってくる時代状況下、1つの建物内に住むポーランド、ウクライナ、ユダヤの各家族は不安でいっぱいだが、音楽教師をしているウクライナ人の母親ソフィア・ミコライウナ（ヤナ・コロリョーヴァ）の下に3つの家族の女の子たちが集う中、少しずつ3つの家族の交流が深まっていく。ところがそんな中、まず最初にポーランド人家族の両親が連れて行かれ、続いてユダヤ人家族の両親が連行されることに。そのため、建物に残るのはウクライナ人一家と、彼らがやむなく「自分たちの子供だ」と言い張ることにした、ポーランド人一家の娘テレサ・カリノフスカ（フルイスティーナ・オレヒヴナ・ウシーツカ）とユダヤ人一家の娘ディナ・ハーシュコウィッツ（エウゲニア・ソロドヴニク）。『アンネの日記』のような暮らしをナチス占領下のウクライナの町の中で続けることができるの？

◆私は中高時代に、カトリック系の男子ばかりの中高一貫進学校に通ったから、宗教画を描いたり、クリスマスソングを歌うこともあった。しかし一般の日本人にはクリスマス・キャロルと言われても何のことかよくわからないだろう。「クリスマス・キャロル」と聞き、かつて稲垣潤一が歌った人気曲「クリスマスキャロルの頃には」を思い出す人はきっと、

バブル時代をカラオケで楽しんだ人たちだと思うが、それでも「クリスマス・キャロル」ってナニ？と聞かれると、ロクに答えられないのでは・・・？

しかして、「キャロル・オブ・ザ・ベル」と題された本作では、ソフィアのピアノに合わせ、音楽の勉強をしている小さな娘たちが、可憐にウクライナの民謡「シェドリック」＝「キャロル・オブ・ザ・ベル」を歌うシーンが再三登場するので、それに注目！

◆ナチスドイツがヨーロッパ全土を支配する中、オランダのアムステルダムでナチスの目を逃れて2年2ヶ月間も過ごした少女アンネ・フランクの物語（伝記）は世界的に有名だが、本作中盤では、ウクライナ人の母親ソフィアが、ナチスドイツに連行されたポーランド人家族の娘テレサ、ユダヤ人家族の娘ディナを「自分たち夫婦の娘だ」と偽って生きていく過酷な風景が描かれる。

その中では“ある悲劇”も起きるが、他方、ソ連の反撃が強まり、ナチスドイツが逃げ出さざるを得なくなった戦況下、ソフィアは新たにドイツ人家族の息子の面倒まで見ることに……。しかし、あの時代状況下、そんなことがホントに可能な・・・？

◆私の学生時代に盛り上がった1960年代後半のベトナム戦争反対闘争では、「アメリカ帝国主義打倒！」がスローガンだった。しかし、第二次世界大戦でナチスが支配していたヨーロッパ戦線にアメリカが参戦すると表明した時、さらに『史上最大の作戦』（62年）で観た通り、“ヨーロッパの解放”に大きな役割を果たしたアメリカはまさに自由の国であり、その軍隊は解放軍だった。それに対して、ナチスドイツを東方から制圧した（旧）ソ連軍が“解放軍”だったかどうかは大きな問題だが、3つの家族の娘たちの子供時代を描く本作では、時々時代を進行させ、今はすっかりおばさんになってしまった彼女たちが“自由の国”アメリカで再会するシーンが登場するので、それにも注目！

もともと、アメリカはイギリスからやってきた「ピューリタン」たちが建国し、世界中の移民たちで成立した多民族国家だから何よりも自由を大切にしてきた国。そのため、ナチスドイツと独裁国家ソ連に苦しめられてきたポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人家族たちが、おばさんになってから再会する舞台はアメリカになったわけだが、そこで抱き合いながら流す涙の重みは、戦後78年間も平和を享受してきた私たち日本人には理解できないものだ。

本作は格別面白いストーリーが盛り込まれているわけではなく、淡々とオレシア・モルグレットツ＝イサイエンコ監督の視点を表現しているだけだが、それでも歴史の重みと、母親や娘たちが流す涙の重みがひしひしと伝わってくる。ウクライナ戦争の着地点が見えない今、本作のような映画を日本で観ることができたことに感謝！

2023（令和5）年7月14日記